様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９７６

研究課題名（和文）道徳の形而上学的概念に関する生成論的視点からの再検討―自然主義の成果をふまえて

研究課題名（英文）Reexamination of metaphysical concepts of morals from the genetic point of view; based on the fruit of the naturalism

研究代表者
宇佐美　公生（USAMI, KOSEI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：３０１８３７５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：脳神経心理学や進化生物学等の研究成果を背景に、道徳の形而上学的概念は自然主義の側から空虚な幻想として批判されてきた。本研究では自然主義者による形而上学的概念批判を再検討しつつ、理性と直観に関する認知科学などの研究成果である「二重過程理論」を活用することにより、道徳の形而上学的概念の成立の機序を生成論的観点から洗い直すことで、それらの概念の実践的意義を再構成することを試みた。そしてカントが指摘していた「無制約者を求める理性の自然的性向」に注目することにより、道徳の形而上学的概念が、行為の事後的説明や正当化のみならず、道徳の普遍性の契機の創出と感情を伴う動機づけにも寄与しうることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The metaphysical concepts of morals, like "Free Will" "Dignity" "Purpose itself " "Responsibility" have been criticized by naturalists as empty illusions, supported by the research of neuroscience and evolutionary biology. In my research I have reexamined such critiques of metaphysical concepts, and attempted to reconstruct the practical significance of metaphysical concepts of morals through reconsidering the mechanism that forms such concepts from the genetic point of view. For that purpose I utilized the "Duel Process Theory" which is advocated in the field of cognitive science and neuroscience. And through paying attention to the "naturalistic disposition of reason which seek the unconditional"(Kant), I have explained that the metaphysical concepts of morals can contribute not only to the ex post facto justification of behavior but also to the creation of universality of moral duty and emotive motivation of moral action.

研究分野：倫理学

キーワード：道徳的自然主義　道徳の形而上学的概念　理性主義　進化論的倫理学　生成論　二重過程理論

１．研究開始当初の背景

人類がなぜ道徳に配慮するようになってきたか、その生成の道筋に関する説明の中で、近年は、進化生物学の他に脳神経心理学、動物生態学、社会心理学など諸科学の研究成果が注目され、それに対応して自然主義者による倫理学研究の成果が続々と公表されつつある。「自己への気遣い」はもとより、「他者への配慮」に関わる様々な機能、形質、評価のルールを発展させ、社会的慣習や制度として定着させてきたことが、人類の生き残り・発展に大きく寄与したことは確かであろう。そうした広義の道徳的慣習やルール、賞罰システムを発展させるにあたっては、ゲーム理論的な淘汰のメカニズムや共感機能の陶冶に加えて、ある時期以降は宗教や形而上学的思索も関与しており、その成果は「自由意志」や「尊厳」「責任」という形で道徳のシステムの中に組み込まれている。ところがこうした形而上学的思索の賜物については、自然主義側から、近年の自然科学的な研究の成果を楯に、自然的過程に還元すべきであるとか、過剰な幻想として消去すべきであるとする提案に晒されている。

これまで研究代表者は、この様な状況認識を背景に、自然主義からの「自由意志論」や「理性的動機づけ理論」への批判の意味とともに、形而上学的道徳理論の意義を検討してきた。特に後者については形而上学的理論による道徳の基礎づけをメタ倫理的な「内在主義」の正当化問題としてとして捉え直した上で、「内在主義」が抱える独断性という課題に対して「道徳の理念性」を際立たせることで応えようとしてきた。しかし道徳が「理念」に留まるだけでは、近年解明されつつある道徳脳などの自然的諸機能との間での「弁証論的」関係を解消することはできない。そのため研究代表者は、道徳の自然的諸機能との確執の中で、自然主義的な説明には還元できない道徳の形而上学概念の洗い直しを通して、ミニマルな形での道徳形而上学の再構築を目指した。この研究を通して、社会的な慣習や制度に組み込まれた「自由」「尊厳」「目的自体」「責任」「人権」の概念や「普遍化可能性」「最大化原理」などの観点と、自然的過程との関係を「原因と理由」の区別を手がかりに捉え直し、さらに「理性による動機付け」の問題もこの区別を手がかりに説明してきた。しかしそうした説明も見方を変えれば、単に事後的な正当化のための方便に過ぎず、人間の実践の実質的な動因として機能するかどうかに関してはなお曖昧な説明にとどまる。そしてこの間にも人間の道徳的機能不全等に関する脳科学研究は、道徳の自然主義的説明をあと押しし、功利主義との親和性を背景に医療や特別支援教育の現場においても実質的な成果を挙げつつあった（cf., P.Thagard, J. Savalescu, D.Pereboom）。そこで研究代表者は、道徳の形而上学的概念および原理の基礎付けを目指す「登り道」に対し、自然主義的な生成論的な視点から形而上学的概念を捉え直し、それを突き合わせてみることにした。それによって形而上学的概念及び原理がわれわれの道徳的行為を可能にする仕組みを説明する「降り道」の説明を補うことができるだけでなく、道徳心理学等の自然主義的研究に対しても新たな視座を提供することができると考えられるからである。

２．研究の目的

本研究では、脳神経科学や道徳心理学、進化生物学などの研究の進展を受けて、自然主義者の側から「宙に浮いた空虚な概念」とか「過剰な幻想」として批判され、その消去や見直しが求められるようになった道徳の形而上学的概念について、自然主義の視点も考慮に入れながら生成論的な視点から捉え直すことにより、それらの概念のリアリティを

評価し直すとともに、その意義を単に理論的に確認するだけではなく、実践的な働きの面でも再評価することを目的にしている。そしてそうした再評価の過程で、以下の点を明らかにすることを目指している。すなわち超越論的論証等によって根拠づけられてきたそれぞれの形而上学的概念が、実践的場面でも相互に連関していて、道徳的世界の意義を根本的に変えてしまうことなしに、それらを完全に消去してしまうことが困難であるだけでなく、それらが道徳的視点からの行為の事後的正当化としてのみならず、実践への動機づけという面でも積極的意義があることを示すことである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では次のような中間的課題とそれに対応した研究方法を設定した。(1)「事実」と「価値」の区分の問題を整理し、両者の間に何らかの通路を描くことが可能かどうかを考察する。それと並行して、道徳の生成に関する自然主義的観点からのシナリオに形而上学的概念の要素が潜んでいないかどうかを確認する。さらに(2)道徳に関する心理学や進化論、脳神経科学などに基づく道徳性の基盤に関する研究の成果を、既存の規範倫理が求める道徳理論と照らし合わせることで自然的事実と道徳理論の連続と断絶の意義を検討する。(3)以上の二つの課題への考察を踏まえながら、「物理主義的自然主義」から「人間の本性としての自然主義」まで幅広く使われる「自然主義」の意味を整理しつつ、各自然主義による「自由」や「責任」「尊厳」などの形而上学的概念の意義づけと批判とを吟味する。これらの中間的課題を考察・解決しながら、自然主義の立場から、消去ないし見直しが迫られている道徳の形而上学的概念を、むしろ自然主義的文脈の中で独特な経路を辿り生成してきたものとして再構成することにより、それらがいかに「作り事」で「幻想」のように見えたとしても、やはり人間の自然的な能力に基づいて「創出」されたものであり、しかも道徳的世界の生成に一定の役割を演じていることを確認する。一旦生成した形而上学的概念が、却って人間の道徳的世界に混乱や過剰な分断、抑圧をもたらしかねない側面もあった点をおさえつつも、それらが道徳的世界の進展において、置き換えや消去不可能な一定の役割を果たしていることを確認する。そして最後に、そのようにして捉え直された形而上学的概念の意義を、教育や医療などの応用倫理的場面で検証する。

(1)の「事実」と「価値」の区別は、一般には、「事実」の記述から「価値」や「当為」を導き出すことはできないという論理的原則を意味するが、この区別を強調するのは、自然主義を批判する理性主義者であることが多い。だがこの区別を指摘したのはD.ヒュームであり、彼はそれを当時の道徳体系論者の杜撰な推論を批判するために用いていた。そしてヒューム自身はむしろ、ある種の「事実」、すなわち「共感」という（価値的）事実から「当為」が導き出せることを示唆していたと解釈できる。ヒュームを現代の自然主義のルーツとするならば、自然主義には道徳の基盤ないし道徳そのものが自然の(事実の)側に既に備わっている、とする立場が含まれることになる。実際、「事実」（である）から「価値」（べきである）を導出できないとする論点を強調したのは、ヒューム本人と言うよりは、彼の自然主義を批判する理性主義的道徳哲学者たちであった。今日、動物生態学や進化生物学、脳科学の知見を背景にヒュームの道徳理論の復権を語る自然主義者たちは、「ある」の側に「べし」が潜在的に内包されていることを強調する。だがそのことは次のような疑問を呼び起こす。ではわれわれが一般に規範倫理として捉える道徳的当為のどこまでが人間の自然的本性の内に

備わっていると言えるのであろうか。

(2)今日、脳科学や進化論的知見を背景に自然主義に棹さす倫理学者の間でも、その意見は分かれている。進化の過程で、社会的生活を営む生物の場合には、一定の協力的行動や利他的で自己犠牲的行動が見られ、それらは生物の生き残りの過程で自然選択的に彫琢され生得的となった特性として（互恵的利他や包括適応度の概念を用いて）説明されるが、そうした行動自体には利他的「動機」が伴うわけではない。またそうした行動が生き残りのために身近な家族や仲間の間で成り立つことは認められても、遠隔の対象への普遍的義務として認知されているとは限らない。その意味でそれらの行動を直ちに「道徳的」とみなすことはできない。道徳的に見える振る舞いをする生物が真に「道徳的」とみなされるためには、「禁止の理解」「欲求に依存しない道徳的禁止」「法律等の人為的規約に依存しないこと」「処罰の正当化の受容」「償いの感情」「普遍性への配慮」などの条件が伴っている必要がある。そしてこうした条件を充たすために善悪や正・不正などの道徳的性質が客観的に実在すると考えるか否かによって進化論的で自然主義視点を採る研究者たちの間でも、その立場は分かれる。人類の道徳現象には、ある程度の共通性は認められるにしても、文化や民族によって多様性が見られることを背景にすれば、進化論的非実在論をとる方が合理的であるとする立場がある。その一方で道徳現象の見かけ上の多様性よりも、その根底に存する共通性の方が大事で、各行動が道徳的であるための条件は多様性の背後で充たされており、しかも道徳的性質は実在する、とする立場もある。本研究では、動物生態学者等の証言を参考にしつつも、できる限り形而上学的な概念の対象の実在を前提しない「節約の原則(principle of parsimony)」に従う形で非実在論に近い立場を採るようにした。

(3)以上のような非実在論をとったとしても、人類の社会生活に道徳的規範が妥当し、行為への道徳的評価が社会生活に流通していること、すなわち道徳的現象があることは認めざるを得ない。そしてそこでは「自由意志」や「責任」「尊厳」などの形而上学的概念も流通している。しかし自然主義者の中には、より基本的で生物に共通する自然的基盤から人間の諸活動を再構成する一方で、物理的自然主義を徹底することで形而上学的概念の虚構性や幻想性を批判し、それらの消去可能性を唱える者もいる。例えば素朴な「自己コントロール能力」という意味に自由意志を還元することで自然主義的決定論との両立を図り、さらには「自由」という形而上学的概念を消去した上で新たな道徳的世界を構想することも可能である(cf., D. Pereboom)、と。しかしそこで提起されている道徳的世界の構成要素を精査すると、別の（しかも間接的に消去した概念をも呼び込む）形而上学的概念（例えば、責任や、尊厳、自律）が密かに組み込まれており、もしそうした概念を排除してしまえば、新たな倫理的課題、とりわけ功利主義的思考の科学技術への浸透に伴う倫理的課題を呼び込む危険性を孕んでいることが明らかになった。

本研究では、こうした中間的課題の考察を踏まえて、動物生態学や脳科学、進化生物学などの成果を受け入れつつ、自然主義による道徳の生成のシナリオに、形而上学的概念が組み込まれる仕組みとその実践への活用の可能性を検討した。その際、参考にしたのは近年認知科学や脳神経科学等の分野で提唱されている「二重過程理論」である。二重過程理論では、人間の認知・判断を直観的で自動的な「システム１」と、理性的で熟慮的な「システム２」とに分け、理性的思考を容量の限られたワーキングメモリを介した「システム２」の機能に割り振っている。そして理性的思考は、（ワーキングメモリの限られた

容量にもかかわらず）言語や数字を典型とする文化的人工物を活用することにより、独自の文化的世界を築くことができている。本研究ではこの「システム２」の機能を、道徳の形而上学的概念の生成を再構成・説明するために活用した。

４．研究成果

脳神経科学や進化生物学、認知心理学などの近年の研究成果を背景に、自然主義者により空虚な幻想として批判されるようになった道徳の形而上学的概念の意義を、敢えて自然主義者の側の土俵に登った上で、生成論的観点を交えながら洗い直すことで、その実践的意義を再構成すること試みた。道徳の基盤となる能力（共感能力、恥の感情、限定された利他心等）は、人類の生き残りの過程で自然選択的に形成・生得化されたことは説明できるとしても、倫理的利他主義や「目的自体」としての「尊厳」などといった形而上学的概念が直接生成してくることはない。そこには思考の飛躍があり、それを可能にしたのが理性の推論能力と考えられる。自然主義者も理性能力を限られたワーキングメモリの働きに限定した上で、その機能を補う外部の文化的人工物（神話、物語、教育制度、政治制度等）を、道徳の生成・発展を支える要素として指摘している。しかしそうした文化的人工物を構築する上で、理性が創発的役割を担っていることを自然主義者は過小評価している。理性は、（無制約者を求める推論を介した）独自の概念構想力を発揮して、例えばカントに見られる定言命法の諸形式や功利主義の最大化原理を彫琢することで、自然の道徳生成過程に不連続な飛躍をもたらした。しかもそのようにして構築された形而上学的諸概念が、「システム１」を含む実践的価値空間を再編し、新たな価値体系の下での道徳感情の創出に寄与していると考えられる。こうして道徳に関する自然主義と形而上学的概念との統合の可能性を提示することができた。そして本研究ではこの自然主義と道徳形而上学の統合の可能性を背景にして、教育現場での効果的な道徳教育の方法の開発・検討を試みた。ただし、そうした実践の成果の検証は今後の課題として残ることになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 宇佐美公生・室井麗子, 佐々木聡也、生徒の主体的な参加を促す「考え、議論する」道徳教育プログラムの開発、『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』、査読無、５号、2018、119-124

② 宇佐美公生、道徳の自然主義的基盤についての検討のためのノート(3) ―道徳の生成をめぐる自然主義的分析の考察―、『岩手大学文化論叢』、査読無、第9輯、2017、35-48、

③ 宇佐美公生、室井麗子、大森史博、板垣健、哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発(2)、『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』、査読無、４号、2017、10-15

④ 宇佐美公生、室井麗子、大森史博、板垣健、哲学対話教育の手法を用いた道徳教育プログラムと教材の新たな開発、『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』、査読無、３号、2016、85-90

⑤ 宇佐美公生、自然主義による自由論とその帰趨、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、査読無、第15号、2016、17-27

〔学会発表〕（計２件）

① 宇佐美公生、「尊厳」概念をめぐる考察の観点について―生成論と形而上学的観点を中心に、 第 19 回一橋哲学フォーラム、於：一橋大学、 2016 年 7 月 30 日

② Kosei Usami, Einige Betrachtungen über das moralische Selbst; Die Bildung und die Fallgrube der Moralität, in Internationaler Workshop 'Genealogie des Subjekts', at Carl von Ossietzky Universität Oldenburg, Germany, 2015, 12, 2,

〔図書〕（計２件）

① 宇佐美公生、カントの正義論と人権論の射程―リベラリズムとリバタリアニズムの間―、『新・カント読本』（牧野英二編）法政大学出版局、2018、297-309

② 宇佐美公生、「尊厳」概念の意味と機能をめぐる生成論と形而上学的観点からの考察、『尊厳概念のダイナミズム』（加藤泰史編）法政大学出版局、2017、119-136

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
宇佐美　公生（USAMI，Kosei）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１８３７５０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）